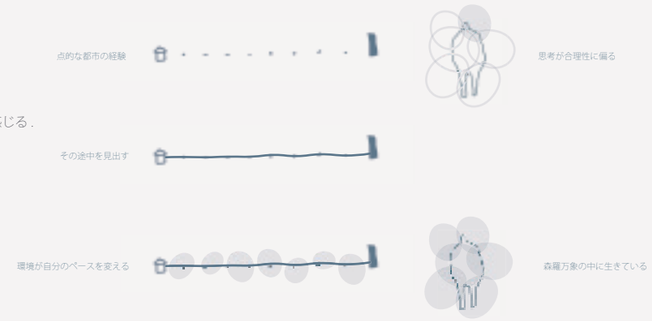
歩行そのものを居場所化する

阿部ほなみ

first of all

途中も大事

近代以降、スピードや生産性を優先して発展してきた都市にでは、
移動時間や空き地といった合理的ではない時間・空間は省かれつつある.
そこでは、我々の行動や考え方が目的を果たすことに精一杯になっているように感じる.
しかし、目的と目的の間には本来、忙しなさで見逃してしまっている
植物や生物、古くからある建物といった我々と異なる時間軸をもつものがある.
そうした異空間に気づいたり目を向けたりすることができれば、
森羅万象の世界の中に生きていることを再認識することができる.
そして 自らを俯瞰し、自分のペースをもって生活を送ることができる
のではないか.



project

移動手段を超えた歩行

ここでは、目的と目的の間をつなぐものとして歩行に希望をもつ.
四年間を過ごした横浜は谷戸地形ゆえにどこでも坂・階段を避けては通れない.
高低差によって
いま歩いてきた場所や住んでいる場所の景色を見れること・
建築の機能や建ちあらわれ方が変わること・
開発しきれない自然地形が残ること といった魅力ももつ.
それらを活かしながら、合理性だけではない移動を提案する.

walks

これからの歩行について

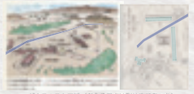
かつての歩行

移動手段だけではない、食事や睡眠と同じくらい大切な歩行

考える
哲 学

歩きながら考え、考えながら歩いた

アリストテレスの学派名：Peripatos（よく歩く人がいる所）



ゼウス：ストア派（考える拠点は列柱廊であった）

祈る
巡礼・迷宮

歩くことで聖人の解釈を
辿り受け取った

十字架の道行き

富士山信仰

読みとく
彫刻庭園

彫刻配置と建築をめぐりながら
寓話やプロパガンダを読んだ

ヴェルサイユ宮殿

動く
ギャラリー

健康のための歩行空間として
つくられた場は今の展示場に

ヴェルサイユ宮殿・鏡の間

楽しむ
嗜好

歩くこと自体を楽しむ

イギリス・ストア庭園

詩人（英）
ウィリアムワーズワース

表現する
芸術作品

歩くことを表現手段に

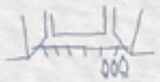
彫刻家（英）
リチャード・ロング

古代ギリシア　中世　16c　18c　20c

現代の歩行

追いやられてしまった歩行

生産するための時間と空間が最大化され構造化されない
空き地や移動時間は最小化された.
さらに情報技術の発達により私たちは外出することなしに
生活が送れるようになった.
一方で個人としての自分やその家族を大事にする場である
家（自宅）でも情報や対人関係から逃れられなくなってし
まった.



使えない空き地

風景のない地下鉄

途中を消しうる端末機

これからの歩行

再び歩きはじめる

いよいよ外出の必要がなくなった人々はむしろ身近に
息抜きや居場所を求めて外へと歩き始める.

移動せずとも目的が家にやってくる

これを機に単なる移動手段ではない歩行を復権して
記憶上も身体的にも途中をつくり
歩くことそのものを居場所化できないだろうか.

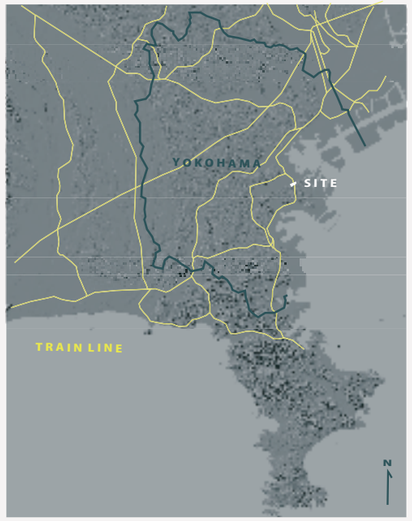
点と点の経験

時空間的経験

site

毎日上り下りする横浜

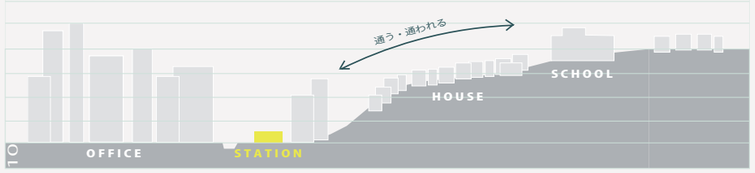
谷戸地形と鉄道



敷地：横浜市中区山手

横浜の住宅地の風景：生えるように建つ住宅とまとまった緑

横浜での典型的な移動



横浜は海抜５０Ｍほどの多摩丘陵・三浦台地からなる．鶴見川・大岡川・帷子川・柏尾川がその台地を削って、湧水地、湿地，森林、畑、田をもつ谷戸地形ができた．谷地に鉄道が通る．周辺にはオフィスや店が集まり、斜面地には住宅が生えるように建ち並び、台地上には病院・学校・団地などの公共施設が集まる．そのため横浜の生活において坂の上り下りを必ず伴う．

site

歩きたくなる横浜山手

敷地である横浜山手も低地に JR 石川町駅があり、山手の傾斜地に学校や住居が集まる．ここでは山手の丘陵地と JR 石川町駅を行き来する人の移動圏を考える．
その中でも特に上図で表している四つの女子校の通学圏に注目した．横浜特有の谷戸地形や開港以降の歴史を感じられる道や場所があるにも関わらず、学生たちは - - - で示しているように明快な道のみを使っている．

proposal

歩行そのものを居場所化する

目的地となる石川町駅や学校、家だけが土地の記憶ではない．道中にある山手の歴史や環境に目が向くように、含むように、移動経験を計画する．
会社から家に帰る前に一息つける場所、学校を出ても学びが続いていく場所、大勢の友達と横になって歩ける場所、一人になりたいときに受け入れてくれる場所・・・
目的地だけの点的な記憶・体験から、自らの居場所が連綿と続いていくようなまちを目指す．

様々な時間軸をもつものが存在する

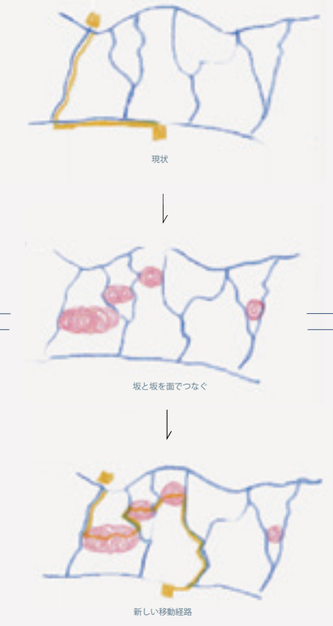
開発されずに残る森から開港時の文化を引き継いだ地面や建物、その後に通った道や高速道路が坂の上下には混在する．

坂と坂を横断する経験に乏しい

敷地内には七つの坂があり、高低差の往来は豊富である．しかし、坂と坂をつなぐ水平方向の経路が乏しい．そのため近くにあるが容易に行けないため認識していない場所が多くある．

diagram1 ―site planning

今まで歩かれてこなかった、坂と坂の間にある余剰空間を敷地とする．
低地（駅）から斜面地（学校・家）までの移動経路の選択肢が広がる．



となりの丘がみえること

鉄輪坂からイタリア山庭園方面を見晴らす

歩いていると、となりの丘や坂が見える．
これによって土地の全体像と現在地が俯瞰でき、場所の認識が広がっていく．

diagram2 ―elevation planning

設計する建築はとなりの丘や階段から見えるようにする．

建築が日常動線を提供する

フェリス女学園の敷地内の道

蓮光寺

イタリア山庭園の小径

建築そのものに用事や目的を持っていなくても、我々は建築が在ることで拓かれた道を日常動線として利用することができる．

diagram 3 ―architecture

今まで歩かれてこなかった余剰空間をひらくきっかけとして建築を設計する．
余剰空間に意味を与え、風景の一部だったものから体得できるものとする．

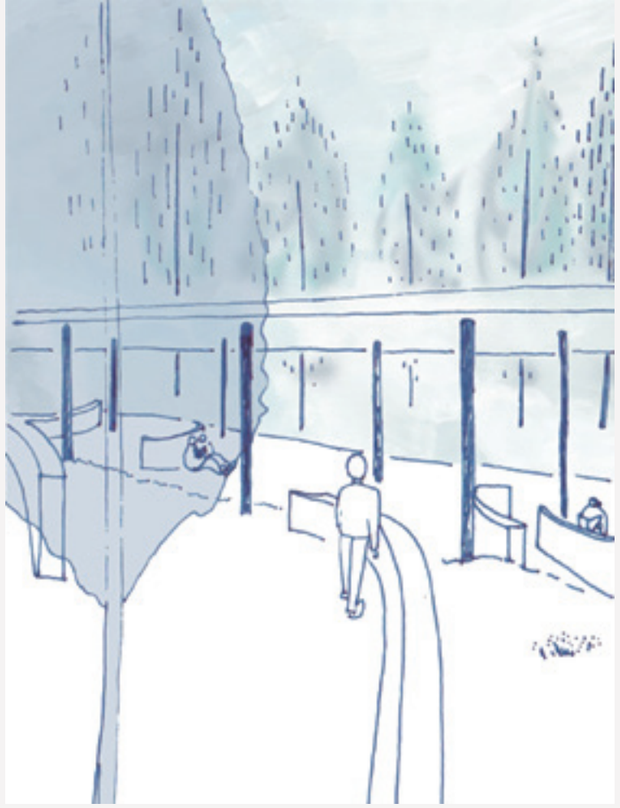
story

新しい通学路

イタリア庭園から横浜港を眺む

奥の景色が見え、だんだんとひらけてくる

巨大な擁壁とまちの景色に挟まれる

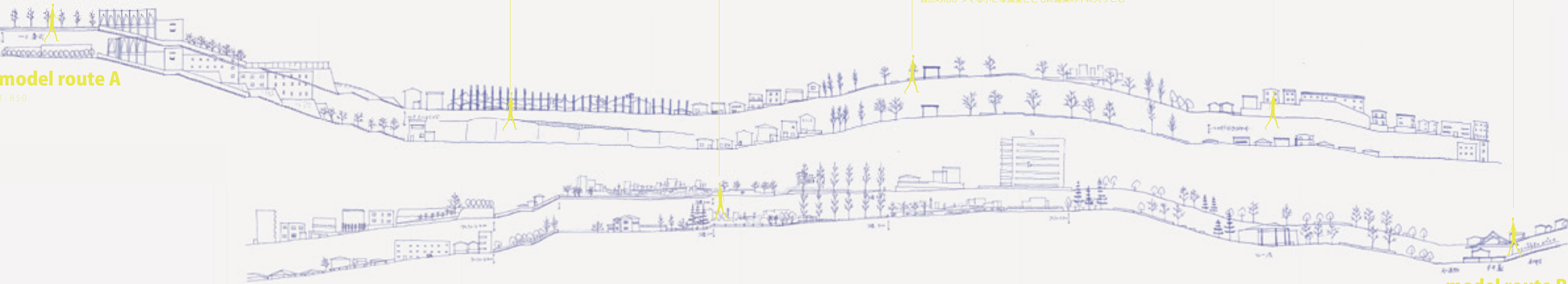


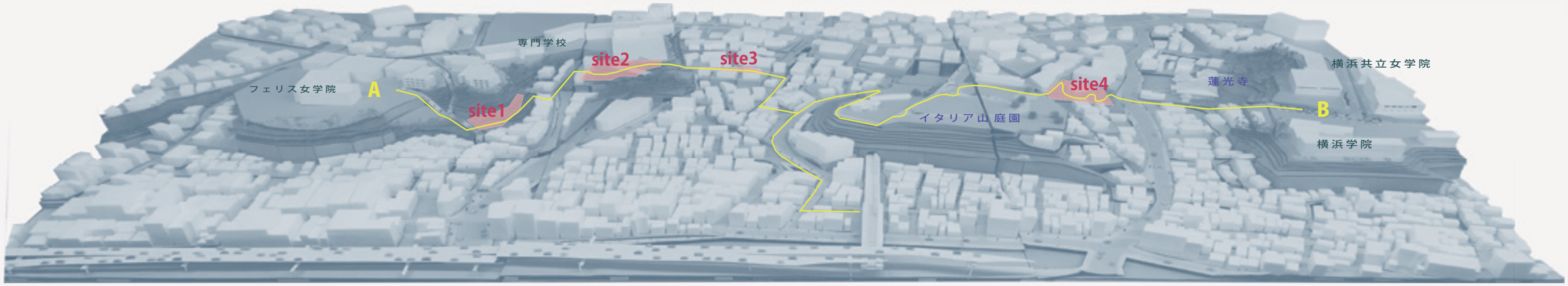
自然の形がつくる小さな擁壁とともに建築の中に入りこむ

乙女坂から地蔵坂をまたいで反対側にあるホールが見える

生活が段差にあふれる

ネコの目線とアリの目線でものをみる

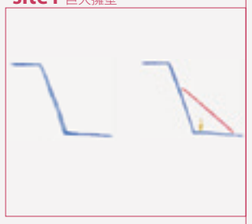




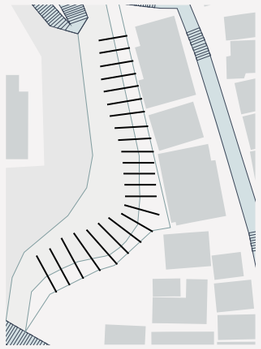
architecture design

建 築が 環境をひらくきっかけとなる

site1 巨大擁壁



都市の中の壁となって現れてくる巨大な擁壁に対して、斜めの支えをつける．その斜度の変化にこの壁の大きさを改めて感じられると同時に普段風景の一部である擁壁にちかづくことができる．

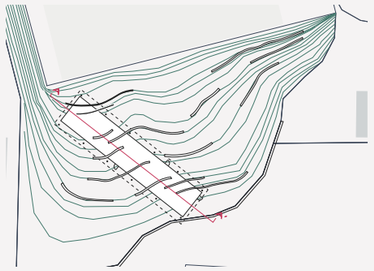


plan 1:1000

10M

site2 森

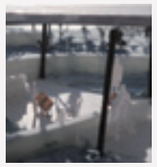
高低差をまたぐように図書室を設計する．緩やかな斜面に対して、小さな擁壁が等高線に沿って建ちあらわれる．自然地形が作る外構が図書室にも流れ込む．傾斜と擁壁があまってお気に入りの場所を選び取れる．

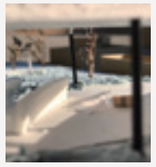


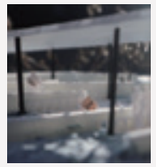
plan 1:1000

10M

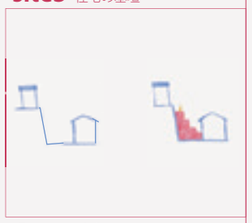
AA'section 1:1000



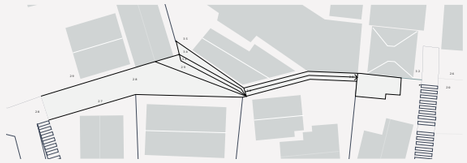




site3 住宅の基壇

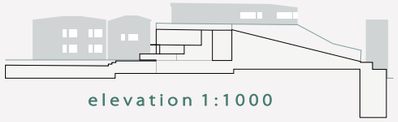


傾斜地にある住宅の基礎は高さ２m～１０mに及ぶ．二つの高低差を階段広場で結ぶ．段差に生活があふれ、まちの廊下になったり住人と学生が得意なことを教えあったりする場所ができる．

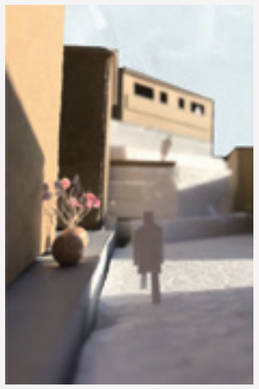


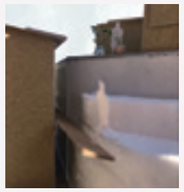
plan 1:1000

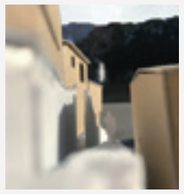
10M



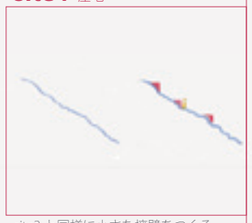
elevation 1:1000



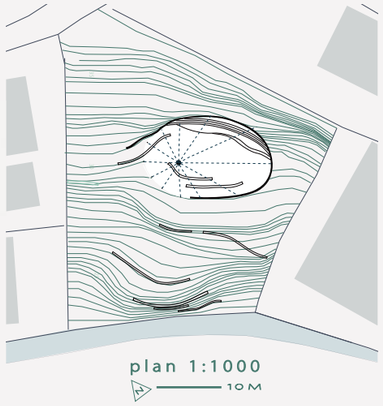




site4 崖地

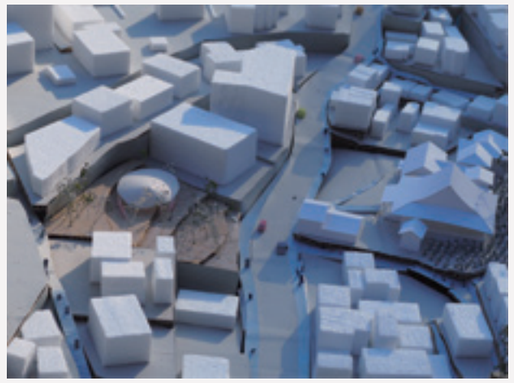


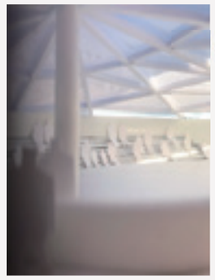
site2 と同様に小さな擁壁をつくる．site2 と異なり傾斜の緩急が激しい．その特徴を生かして大きな気積をもつホールをつくる．地蔵坂沿の建築の大きな基礎と同様に大きな壁となって現れてくる．



plan 1:1000

10M





ー小さな擁壁（site2・site4）
沿うこともできれば、従わずに自由な軌跡を描くこともできる．同時に崖崩れを防ぎ環境を維持する外構ともなる．

Comments from Classmates

人を巻き込むエネルギー、人の和にすっと入り込めること。あべほの為人に心底感心した卒制期間でした。

八木橋京

自身の経験から歩くことが線的な体験を生みそのこと自体が居場所 (空間) になるというあべほらしさが詰まった作品。設計がどうあるのか詳しく見たい部分もありましたが、体験を美しいドローイングで表現しており、本人の思いが伝わってくる素晴らしい作品だと感じました！

藤澤太朗

自分の関心事・良いと感じた経験などを丁寧に探って、そこから着実に提案の内容を固めていった印象があり、自分の表現したい世界観がはっきりとしていて羨ましく思った。だからこそというか…偉そうなことを書いて申し訳ないけど、しょっちゅう話を聞いた中で、その固有性をあまり自覚していないんだろうかと感じた場面が時々あり、その度に歯痒かった。正直なところ、もっと自信持ってやればいいのに、と思ってしまう。

髙橋健

途中こそ豊かな時間である、というあべほの設計テーマは、私にとってもすごく共感できるもので、どんな空間が生まれるんだろうって春学期からずっと興味津々でした。途中っていう形がないものをいかに作るんだろうって。地形とか街の種類とか見える風景とか、設計で大事にしているものに、そのまんまあべほの哲学が全部出てる気がして、良い卒制だなぁと思っています。また喫茶店エスキスという名の、美味しいもの食べる会たくさんしようね。

河野美紀

初期から歩行というテーマでやっていて、それがあべほにとって確かに大事だと他のみんなも分かるほど合ってた良いテーマだった。合理的な都市の中に合理に縛られない自由な場所をつくりたいという思いは自分と共通していて共感する。ただ歩行だけでは建築のプログラムになりづらいのが難しかったと思う。しかし最後に出てきた図書室のように歩きながらする " なにか " をプログラムとすることで、道と敷地に二分された現代の都市を捉え直し、道に交通以外のプログラムが与えられて、道を敷地とする新しい建築の可能性が見えた気がした。

石川泰成

あべほの良いところは自分のテーマと真摯に向き合い続けていたことだと思う。そして、そのテーマというのが建築の視点だけでなく様々な視点から捉えることのできるものだった。だからこそ、敷地や配置計画などの空間をつくる前の段階で悩みまくっていたのだと思う。最終的に建築の「設計」をするという面では不十分だったかもしれないけど、常にエスキスをしていてあべほの興味が建築を設計するということだけではないことが良く分かった (笑) あべほが将来どのようなことをするのか楽しみ。あと、あべほは日本語へたなのに、プレゼンや人に伝えるときの「言葉を選び取る力」はとても優れていると思うし、さりげ尊敬してる。これは人を惹きつけるあべほ自身の魅力でもあるし、これからもさらに成長すると思ってます。

永長穂高

あべほらしさがあふれてたなぁと思います。目的のすきまにある感動や発見を楽しむ遊び心が彼女の日常にはあって、それがそのまま設計テーマになったかんじ。その遊び心の多くは意図されてない対象に向けられるので、その対象を意図的に建築でつくろうとすると難しいよね…だからこそ考える価値があるんだろうなぁと途中経過を聞きながら思っていました。
今までの設計課題でも山とか擁壁とか坂道とか大きな存在に興味が向いてて、それはきっと身の回りの建築の多くは意図や目的が強すぎて、あべほの遊び心が入り込みづらかったのかなと勝手に納得しました。
そういううっかり見落としそうなことをちゃんと見つけられる人だからかな？人を褒めるのがすごく上手で、素敵だなと思います。

寺西遥夏